

ご紹介：牧口さんの講演を小中学校の時代に聞いて福祉の道に進んだ大学の先生たちがたくさんおられます。そのように人生の目標まで変えてしまう牧口さんのお話を今日は堪能して下さい。



トークから:

車椅子って、長いこと病院の器具だった。車椅子で街を散歩していると、かならずパトカーを呼ばれた。どっかから逃げてきた人やと思われた時代があったんです。

1974年ごろ「車椅子全国市民集会」つちゅう大会が仙台であった。2回目が1975年に京都であった。ちょうど京都が地下鉄を建設する話が出てましてね。「僕たちが乗れるような地下鉄作って」というごく自然なかたちで運動が始まった。僕たちが京都にのこのこ行きますと、京都の連中がですね、「運動が突っても、大阪エレベータあれへんやろ。ほんなら、そのまま京都に帰らなあかんの？」って言われた。「そらそやー」って思ったんですよ。大阪も運動起こさな、京都の人に申し訳ないと思ったのね。

ところが、大阪はもう地下鉄が縦も横も走ってんですね。運動ちゅうのはタイミングつちゅうのがありましてね。タイミングが合致せえへんかったら、世の中に説得力がないのね。ほんで、「きっかけないかな、きっかけないかなー」って5人で探していました。そしたら生野区の市議員が、まるで自分の功績の様にビラをまいたのね。「この地域も便利になります！」って大きい書いてあるわけ。ほんで、大阪市の交通局に行きましてね、「車イスや障害者のメンバーにも便利になるんですか？」って確かめに行きました。「新しい作る駅からでもちゃんと設備の整った駅にして下さい」と言ったのね。「いやー、そんなお金がないー」って言うんですよ。

それで私たちは大阪でも「誰でも乗れる地下鉄を作る会」っていう会を作りました。このころからですね、「誰でも」という発想が出始めたのは。そや、障害者の為だけのエレベータやないんや。お年寄りも使いやすいくなるし、妊産婦の人やベビーカーを持ってる人だって助かるんや。

聞いて欲しいのはね、交通局との交渉の成り行きなんです。私たちは交通局に、「何月何日交渉したいから」って言って約束を取る。向こうもしぶしぶ、日を決めてくれた。それで15人、ずらーっと車椅子とか障害者がこう並んで、臨む。向こうの営業課っていう係長さんがね、二人ほど来るんですよ。それで交渉が始まるわけね。

「私たち障害者のことをあなた方はどう考えてくれてるんですか？」ってやるわけね。中には、自分の履いてた義足を、がばっとはずしてね、交渉の机の上へ、でーんと置いてね、「分かつんのかよー！！」とかやる。ほんなら向こう、「どひゃー！！」とか言って下がるわけ（笑い）。

そんなこと何回かやっていくうちにね、障害者と話をするのが初めての人がほとんどやから、「知りませんでした、知りませんでした」ちゅうて、だんだん頭が低うなってくるわけ。

「分かってくれました？」って言うたら、「分かりました」ってなるわけね。僕は一応代表者としてね、あんまり喋らんようにしようって、こんなにお喋りなのがですね、しゃべれへんというのは苦しいんですよ。（笑い）それでも一応辛抱して様子見てると、ほんとに変わっていくんよ。「ほんとですよねー、そうですよねー、私たちは何にも知りませんでした」ちゅうて、謙虚に頭下げていくわけね。

